

国

語

(一〇〇分)

(注意事項)

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は一冊(1頁から17頁)、解答用紙は二枚(問題一用紙と問題二用紙)あるので注意すること。
- 3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。
- 4 試験開始直後に、各解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問題
一

(二〇〇点)

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇一四年一月三日の午前六時半に有楽町駅沿線で起きた火災は、鉄道のダイヤグラムとともにわたしたちの予定を混乱させた。東海道新幹線のほぼ全線と、山手線、京浜東北線、東海道線の一部の列車の運転を、お昼過ぎまで止め、駅の改札口周辺や再開した列車の車内を混乱させた。妻とわたしは都内にあるわたしの祖母の家に行くのをあきらめて、妻の祖母が住む福井に向かうことにした。一方、兄は母と父とともに、予定を大幅に遅らせて祖母の家に出かけた。祖母に挨拶をし、うちに戻る途中の最寄り駅から、兄はまたいなくなった。

わたしと妻は予定されていた福井までの路線を予定とは違った時間に旅し、兄はそもそも予定されていなかった大阪までの路線を旅した。

一月四日の夜、母からわたしにかかってきた電話は、兄が大阪の天王寺警察にいますというものだった。母は、わたしに、今から迎えに行けるのかを尋ねた。すでにこの時間に天王寺まで行くのは無理なことを伝えると、母はそれなら自分が迎えに行くと言った。この時間に迎えに行ったとしても、大阪で一泊せざるを得ない。ならば、わたしと妻が翌日の早朝に迎えに行ったほうがいい、とわたしが言くと、母はそれだと兄は一晚警察署で過ごすことになってしまうと返した。

困ったなあと思ったところで、とっさにわたしの頭が回転した。兄が保護されている天王寺警察は、釜ヶ崎にあるNPO法人こえとことばとこころの部屋（以下、ココルーム）の喫茶店のふりをした事務所に近い。ココルームの代表で、詩人のウエダさんの携帯に電話をかけると、一晚警察署で過ごすのはかわいそうだと言って、すぐに迎えに行ってくれることになった。わたしは母に電話をし、翌日、わたしと妻が釜ヶ崎まで行って、兄と一緒に帰ることを伝え

た。母がウエダさんに電話し、身元引受の方法について話をした。迎えに行く道すがら、ウエダさんは、兄の介助者をしているカリヤサキさんが越冬闘争に参加するために釜ヶ崎にいるのを思い出した。ウエダさんが電話をかけると、夜になってもその日の宿を決めていなかったカリヤサキさんは、渡りに船と兄と一緒にホテルに泊まってくれることになった。

翌日、わたしと妻はバスと電車を乗り継いで、ココルームまで行った。福井の親戚にいただいた土産^{みやげ}を出しながら、喫茶店のお客やココルームのスタッフとちゃぶ台を囲み、正月の里帰りのようにお雑煮とおせちを食べた。数年前まで、釜ヶ崎の越冬に参加していたわたしは、この年も期せずして越冬に参加することになった。

食後、居合わせた人びとと、兄がどうやってココルームまでやってきたのか、話に花が咲いた。すると、それまでずっとだまり、確実におせちを摂取していた兄は、自分が話題にされているのを決まりが悪く思ったのか、初めて「うちかえろう」と呟^{つぶや}いた。^②あまりに自分勝手な言葉に、一同ほがらかに笑った。妻とわたし、兄とカリヤサキさんの四人で、帰省ラッシュで大混雑の新大阪駅から自由席に座るために奮闘し、そして東京駅を経て埼玉に帰った。

地元の駅から天王寺までのどこかで一泊したあとで、兄は天王寺まで行った。駅の近くのたこ焼き屋で売り物のオレンジジュースを手にしたところで、たこ焼き屋の店主に声をかけられた。不審に思った店主は、面倒見のいい人で、彼を迷い人と考えて、警察まで連れていってくれた。地元の駅から、たこ焼き屋までの足取りは不明である。

このときの旅でも、兄はお金を持っていてはいない。人に道を聞くことはしないし、携帯・スマホなども持っていない。だから、スマホで経路を検索することもない。路線図を読むこともないと思われる。そんな中で兄がどんなふうに世界を認識し、どのように五〇〇キロ以上も離れた天王寺までたどり着いたのかを考えると、さまざまに思考が刺激される。

兄は駅からいなくなった。だとすれば、少なくとも一部の区間は鉄道を利用して移動しているはずである。彼が鉄道による移動が好きなことを考えると、高い可能性ですべての移動は鉄道によるものだとも推測される。

この六年前に、兄はわたしや見沼田^{みぬま}んば福祉農園の関係者とともに、天王寺を二回訪問していた。その際には、コルムに行つてウエダさんにも会っている。だから、兄がウエダさんらに会いに行つたということも考えられる。

今までの一人旅の行き先は、都内にある祖父の家だった。祖父が亡くなってからは、東京都内の繁華街に出かけるのが多い。^③ 兄にとって好きな場所——わたしにとって、兄が好きだなと感じられる場所というのが正確かもしれない——に出かけていることが多いようである。

それまでの一人旅でもっとも西に行つたのは箱根。そのときは、わたしの母方祖父母とともに、毎年家族旅行で出かけたホテルまで行き、馴染^{なじ}みの仲居さんから電話をもらい、母が迎えに行つた。西日本に行つたことはない。

二〇一二年に開催した日本ボランティア学会北浦和大会では、二日間すべてのプログラムに参加したあと、閉会時の混乱にまぎれて旅立つた。わたしの職場のある横浜の駅近くのラーメン屋の前で保護された。つまり、家族に関わる場所や、家族が話題にのぼらせる場所に行くことがある。であるならば、元旦に実家でわたしと会つた際に、新幹線を乗り継いで福井に行くことを聞いていた。また、介助者のカリヤサキさんが釜ヶ崎に行くということも、実際に彼が兄の介助に入る際に聞いていた。であれば、わたしのようにな新幹線に乗りたくなくなったのかもしれないし、あるいはわたしや妻、カリヤサキさんに会いに行こうとしたのかもしれない。

そんなふうに兄がなぜ旅をしたのか、どのように旅をしたのか思いをめぐらす。その答えを出すための手がかりはあつても、答えを出すことはできない。そもそも兄がいなくなったのは一月三日であり、天王寺で保護されたのはその翌日である。一晚をどこかで明かしているはずだが、それがどこなのかはわからない。

兄は遠く離れた場所を、わたしや家族にとって思いもよらない、彼なりの仕方で結びつけ、そのことによってわた

しが^④常識的な尺度でつくりあげた世界観を揺さぶる。地元駅から、天王寺まで線路が敷設されている。その最短の経路が兄の旅程そのものと想像する。しかし、線路の軌道と実際の旅程はほんらい別物である。途中下車や乗り換えをすることもあれば、ダイヤ乱れによって経路の変更を余儀なくされることもある。それなのに、わたしたちは最短の経路が唯一の旅程だと錯覚し、その先に空間をイメージする。東京駅から新大阪駅までの旅程は五〇〇キロで、二時間半かかるというふうに、離れた場所を距離と時間の秩序で整理し、理解可能なものに変える。ふたたび書くが、軌道と旅程はほんらい別物である。兄がどのように旅をしたのかは、わからない。その別物であるからこそそのわからなさが、一人の人間の存在の孤立なき孤独を根源的にあらわしているのだとわたしは考える。

沿線火災によって、鉄道のダイヤグラムは乱れた。わたしの祖母の家での正月の家族の対面は果たせなかった。一方で、妻の側の親族との対面は果たされた。そんな中、兄が^{ほっしん}発心して西に旅立つことによって、わたしは釜ヶ崎で血のつながらないが、ゆかりのある人たちとの対面を果たすことはできた。兄が保護されると、わたしはウエダさんのことを思い、ウエダさんはカリヤサキさんのことを思い、やがて兄を介して、わたしはウエダさんにも、カリヤサキさんとも釜ヶ崎で会うことになった。本来の予定どおりになかったが、結果的にとても濃密な旅になった。

それは、「知的障害のある中年男性が失踪し、警察に保護され、家族が迎えに行った」で片づけられる話だ。わたしは^⑤それにおさまらないものを感じ、兄と釜ヶ崎で再会してから、Facebookで発信した。するとさまざまなひとがこの出来事についてリアクションしてくれた。そうやってシェアされたことで、出会った人もいる。

たとえば、アサダワタルさんがシェアした記事に、浜松で障害のある人とアート、表現をめぐる活動をしているNPO法人クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）代表のクボタさんがコメントをしたことで、わたしとクボタさんはつながった。兄との大阪の旅の翌月、わたしは妻と九州を旅行しようとしていたのだが、大雪で飛行機が飛

ばなくなり、行く先を新幹線で行ける東海地方に変えた。クボタさんに連絡を取り、レッツを訪問することになった。クボタさんは鍋を料理してくれており、わたしと妻はレッツの活動スペースに布団を敷いて泊まった。だから、ひと月前の兄の旅は、大雪に際して途方にくれたわたしたちに、新たな旅の目的地を与えてくれるものでもあった。

だとすると、わたしが兄の世界を解釈するだけでなく、兄がわたしや妻の世界を解釈しているとも言える。お金を持っていない、そして文字を読むわけではない兄が天王寺まで行けてしまったことの背後に、兄自身が十分に知ることができていない、〈何かとんでもない力〉^⑥を感じるとともに、その〈何かとんでもない力〉は兄の旅が終わったあとも、わたしの世界を解釈し、構築していく。

（猪瀬浩平『野生のしっそう』による）

注1 越冬闘争……行政機関が一斉に休みに入る中で、路上で暮らす人びとの命を守るため、たくさんの方の支援者やボランティアがあらつたり、炊き出しや夜まわりが行われる。

問1 傍線部①「母はそれなら自分が迎えに行くと言った」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問2 傍線部②「あまりに自分勝手な言葉」とあるが、なぜ「自分勝手」と言えるのか。説明しなさい。

問3 傍線部③「兄にとって好きな場所——わたしにとって、兄が好きだなと感じられる場所というのが正確かもしれない——に出かけていることが多いようである」とあるが、「兄にとって好きな場所」を「わたしにとって、兄が好きだなと感じられる場所」と言い換えた方が「正確かもしれない」のはなぜか。説明しなさい。

問4 傍線部④「常識的な尺度でつくりあげた世界観」とあるが、ここではどういうことか。具体例を挙げて説明しなさい。

問5 傍線部⑤「それにおさまらないもの」とあるが、どういうものか。具体例を挙げて説明しなさい。

問6 傍線部⑥「〈何かとんでもない力〉は兄の旅が終わったあとも、わたしの世界を解釈し、構築していく」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近代詩人の一人、中原中也(一九〇七―三七)を例にとって、詩の朗読の問題を考えてみよう。彼が自作詩の朗読を好んだことは、さまざまな友人たちが回想のなかで語っている。だが、残された評論や随筆、あるいは日記や書簡のなかに、自作詩の朗読に触れて書かれたものはない。また、当時レコードは普及していたが、彼の朗読が録音される機会はなかった。したがって、中原が自作詩をどのような声で、どのように朗読したのかは、友人たちの回想を通して想像するより他にない。

中原が声に関して述べている評論に、一九二八(昭和三)年に書かれた「生と歌」がある。冒頭で「古へいにしへにあつて、人が先づ最初に表現したかったものは自分自身の叫びであつたに相違ない」と言い、「その時に人は、「ああ！」と呼ぶにとどまつたことであらう。／＼然るに、「ああ！」と表現するかはりに「ああ！」と呼ばしめた当の対象を記録しようとしたと想はれる」と書いている。

「ああ！」というのは声による表現である。例えば、人が初めて海を見て「ああ！」という感嘆の声を発する。人の記憶や経験のなかでは、つまり文字化されない前は、「ああ！」という声の響きと、初めて見た海の情景とは重なりあう。しかし、感動させられた海について、いざ文字で表現しようとする、「ああ！」という声そのものは遠のき、海の情景を感嘆の声に似せてしか描けない。

①これは誰もが体験し、感じていることだ。中原は評論「生と歌」の後半で独自の音楽論を展開しているのだが、そのこととは別に、この評論の冒頭部分で、素朴だが、正確な声と文字の関係が述べられていることに注目しておきたい。

言葉のなかで文字という言語の平面が占める領域は限りなく小さい。かつての文字の無い社会では、言葉はなによ

りも声そのものであった。そのことは、現在の地球上に成立している無文字社会でも同じである。

文字社会に生きているわたしたちは、文字で表現する文化を重視するあまりに、^②声そのものが文字によって大きく制限されるようになっていくことに気がつかないことが多い。

中原が書いた「ああ！」という文字化された声からは、実際の感嘆の声が持っていたはずの、アクセントや間合いやリズムがそぎ落^{おと}されている。その上で成立しているのが、文字という言語の平面にある「声」である。それは文字を目で確かめて読み、あるいは文字を通して口ずさむことで確認される音のまとまりである。

そのような文字に浸食された「声」を、文字によって書かれた詩のなかから救い出そうとする試みが、詩の朗読である、というふうに見えてみよう。これは、楽曲にあわせて詩が歌われる、歌唱（朗誦^{ろうじゅう}や吟詠を含む）とは別のものだ。

歴史的に朗読の伝統がある西欧と違って、近代の日本は、声の文化を失うことから出発した。「読み、書き、算盤^{そろばん}」を第一義と考えた日本の明治期以降の近代教育制度は、なによりも文字文化中心であった。『論語』の暗唱という近世から続いてきた声の文化も、日常生活からしだいに廃れた。

「朗読」という概念が日本の詩人たちに発見されるようになったのは、大正期以降の口語自由詩の時代になってからである。しかし、それまで書かれていた文語定型詩なら詩吟のように朗詠することはできても（そこには様式があるからだ）、日常語を使用した口語自由詩を声に出して表現するということは、^③極端に困難な道筋を要した。

口語自由詩を書くときは、ひとつの作品ごとに、内容に即した様式を作り、また別の作品ではそれを壊して新たな様式を作ることが求められる。それと同じように、口語自由詩を声にして表現するとき、どの作品にも通用する一定の朗読法というものは成立しない。

また、他人の前で声に出して自作を朗読するということが、まず最初に羞恥心をとまなうものであるということは、

朗読者の誰もが身をもって経験することだ。そのことは現在も変わることがない。詩人はなによりも原稿用紙の上に文字を書くことを仕事としており、舞台の上の俳優ではない。また、楽器を奏でる音楽家でも声楽家でもない。にもかかわらず、声を出そうとするとき、何を必要とされるのか。

その作品が、文字の上だけではなく、声によって別の作品に変貌していくこと。あるいはヨムことによって、文字に押し込められ、抑圧されていた言葉のさまざまな富を、聞き手の側に、自由に浮かび上がらせること。

また、朗読者にとって重要なのは、自分の声を発することだけにあるのではない。詩の朗読は、朗読する場（空間）の音、聴衆の反応や会場の雑音などを聞くことから始まる。朗読の場の音の隙間に、自らの声を贅（^{にえ}）のように差し出すこと。そのようにして、朗読者の声が小さな共同体としての朗読空間の響きのひとつとなつて、^④空間と共鳴しなければ、詩の朗読は成功したとは言えないのだ。

（佐々木幹郎「自作詩朗読と日本の詩について」による）

問1 傍線部①「これは誰もが体験し、感じていることだ」とあるが、「これ」とはどういうことか。説明しなさい。

問2 傍線部②「声そのものが文字によって大きく制限されるようになっていく」とはどういうことか。説明しなさい。

問3 傍線部③「極端に困難な道筋を要した」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問4 傍線部④「空間と共鳴しなければ、詩の朗読は成功したとは言えないのだ」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問題二

(100点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中比、甲斐国に嚴觸房とか申しける学生、明匠の聞こえありければ、修行者など集りて給仕し、学問しけり。あまりに腹あしき上人なりけり。修行者ども、時、非時などさばかりて、荷用しけるに、湯のぬるきをも熱きをも叱りけり。遅く持ちて来るをも腹立て、疾く来たれば、「法師に物食はせじとするか」とて、食ひさして叱りけり。そのあはひを窺はんとて障子の隙より窺へば、「あれは何を見るぞ」とて殊に叱りければ、常には心よからねども、よき学生なりければ、忍びてぞ学問しける。

妹の女房ありけり。最愛の子息に遅れて、人の親の習ひといひながら、あながちに嘆き悲しみけり。あたりの人も訪ひ哀れみけるに、この上人とはざりければ、女性の癖にて、「あらうたてや。これほどの嘆きを上人のとはせぬよ。よその人だに情けをかけて訪ふことまでこそあれ」といひけるを、弟子の僧聞きて、「女房の恨み申したまふなるに、御訪ひ候へかし」といへば、例の腹立ちて「無下の女房かな。法師が妹なんどいはん物は、普通の在家人に似るべからず。生老病死の国にありながら、愛別離苦の憂へなかるべしと思ふか。あら不覺や。いふかひなき女房かな。いでいで、行きてつめて来む」とて、かさかさとして行きて、「実にや、女房は、子息に遅れたるを法師が訪はぬとて、恨みたまふなるは」といふに、「あまりの嘆きに心もあられぬままにや、さる事も申して候ひけん」といへば、「無下の人かな。さすがこの法師が親しきしるしには、生ある者は必ず滅す。会ふ者は定めて別る。南浮は老少不定なり。前後の相違、母子の別れ、世に無き事かは。はじめて嘆き驚くべからず。返す返すいふかひなし」と叱りければ、「形のごとくこの理は承り知りたれども、身を分けて出て、なつて侍るゆゑに、かつは心操もかひがひしく候ひつれば、何の道理も覚えす、ただ別れのみ悲しく覚えて」とて、泣きければ、「あら愚痴や。道理を知りながらなほ嘆くべきか」とて、いとどあららかにぞ責めふせける。

とばかりありて、この女房、涙を押しのごひて、「そもそも、人の腹のあしきは苦しからぬ事か、失ある事にや」といふ。答へければ、「貧瞋痴の三毒とて、むねとの煩惱の中の一つなれば、子細にや及ぶ。恐ろしき失なり」といへば、「などさらば、それほど知りたまへるに、御腹はあまりにあしきぞ」といへば、はたとつまりて、言ひやりたる事はなくして、「よしさらば、いかにも思ふさまに嘆きたまへ」といひて、叱りて出にけり。実につまりてぞ聞こえける。

物の理を知ると、知るがごとくなすとは、道異なり。されば、「知る事の難きにはあらず。よくする事の難きなり」とこそ書にも見えたれ。失を知りて失を改め、理をわきまへて理にしたがふを、賢人とも智者ともいふなり。たとひ多聞・広才なりとも、身の失を改めず、心のひがみを直さずは、いたづらに宝を数ふるがごとし。されば七種の聖財には、智恵と多聞とを別に出せり。学生の才覚あるに、いかでか必ずしも智恵ありて教へにしたがはんや。

ある俗の申ししは、「智恵もなく愚痴なる在俗なんどの不当なるは、さるべきことなり。仏法の理をも知り、多聞広学なる僧のふるまひの心得られず覚え候ふなり。何を習ひ知りたるかひこそなければ」といひしを、この道理を申して、知ると為すとは異なり、世間の安かるべき事、なほ知るは安く、為すは難し。されば書には、「知る事の難きにはあらず、よくする事の難きなり」といへり。「先ず弓箭をもてあそぶ人、合戦の庭に命をも捨てず、ひと引きも引き、逃げ隠れ、怖ぢふためくは、口惜しく、恥とは知りて侍り」などいふに、「いかでか知らざらむ」といふに、「然らばさて、この事知りたる人は、人毎に心も剛にありや」といへば、「さる人はいかでか人毎にあるべき。希の事なり」といふ。さらばこれをもてなぞらへ知るべし。

（『沙石集』より）

注1 時、非時などさばかりて、荷用しける …… 午前・午後に食事の支度をして給仕する。

- 注2 女房 …… ここでは妹のこと。 注3 生老病死の国 …… 仏教のいう四苦の国。現世のことをいう。
- 注4 南浮 …… 仏教において人間の住む世界を指す。 注5 貧瞋痴の三毒 …… 仏教の言葉。人間の根源的な三つの煩惱。
- 注6 七種の聖財 …… 仏道修行に必要な七つの財産。

問1 二重傍線部「あられぬままにや」を解答欄に書き写し、例にならって品詞分解しなさい。

【例】

かく	副詞	まで	助詞	おぼしめす	動詞・終止形	と	助詞	は	助詞	知り	動詞・連用形	はべら	補助動詞・未然形	ず	助動詞・打消・終止形
----	----	----	----	-------	--------	---	----	---	----	----	--------	-----	----------	---	------------

問2 傍線部ア「聞こえありければ」、イ「あながちに」、ウ「いふかひなき」、カ「腹のあしき」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問3 傍線部オ「いとどあららかにぞ責めふせける」、ク「この事知りたる人は、人毎に心も剛にありや」をわかりやすく現代語訳しなさい。

問4 傍線部エ「形のごとくこの理は承り知りたれども」とあるが、ここという「理」とはなにか。説明しなさい。

問5 傍線部キ「いたづらに宝を数ふるがごとし」とあるが、どうということか。説明しなさい。

